和装製品製造業

プロフェッショナルの養成所
～タイトルホルダーへのレールがくっきりと見える企業～
7-15 和装工房 匠（高田和裁）

タイトルホルダーだけがバッグを作る会社

高田和裁は、着物やバッグの縫製を行う企業である。1 つ数十万円もするバッグや、着物などを製作し、大手百貨店などに卸している。

同社の代表である高田氏は「うちは、企業というよりも、プロフェッショナルの養成所と捉えています。5 年でプロになり、6 年後には独立できるように徹底的に技能を積み上げられるようにしています。技能検定 1 級は受検すれば全員が合格します。」と企業哲学を語ってくれた。高田氏はまた、「着物は全社員が縫製に携わりますが、バッグは技能競技大会で受賞されたタイトルホルダーしか携わっていません。」と言う。タイトルホルダーしか製作に携われないという方針は、バッグに宿るブランド価値を高めることに通じている。

技能検定は社員の 100%が合格しており、技能五輪の優勝者が 1 名、技能グランプリの優勝者 1 名と準優勝者 2 名がそれぞれ在籍している。

高田和裁が作り出す皮製品事業者とのコラボ製品（バッグ）やウシオライティングとの共同開発による照明器具

プロとして「我流」を極める土台が技能検定

同社にとっての技能検定とは何か。「縫製技能は人によって異なります。わが社ではプロは『我流たれ』と常に社員に伝えています。『我流』を重視するので、一方で基礎的技能は社員全員で一定のレベルを確保しておかなければなりません。技能検定はそのための手段です。」と高田代表は語ってくれた。プロとして「我流」を極めるためのスタート地点が技能検定というわけだ。

異業種とのコラボレーション（連携）で新製品開発

高度な技能士が揃う高田和裁は、異業種とのコラボレーション（以下「コラボ」）にも挑戦している。1 つは、姫路市皮革産業活性化事業研究会と連携した姫路市の革製品事業者とのコラボである。姫路市には皮革事業者が多いが、安価な中国製品に押されていた。そこで高付加価値路線に転換するために高田和裁と連携し、皮革と和織物のコラボ製品を考案した。同社では着物を中心とした和織物を主としてきたため、当初技能士からは「なぜ皮を縫わなければならないのか」という反発もあったが、クオリティが高く顧客からの評価も高い完成品ができ上がると次第にコラボ製品への意気込みも高まっていった。これ以外にも、上場企業であるウシオライティングとのコラボにも取り組むなど、高度な技能を異業種とのコラボに活用して、次々に新領域を開拓している。

技能レベルに応じた製品製作でスキルアップ

高田氏は社員にプロフェッショナルとしての階段を登ってもらうため「努力は絶対に報われる。経営者としては間違った努力は絶対にさせません。」と力強く語る。その方針は、5 年間で一流のプロになるためのハードルをきっちり用意することに具現化されている。1 年目は、基礎的技能が幅広く必要とされる浴衣製作に携わる。2 年目は、生地に伸び縮みが出て難しくなる単衣の着物を製作する。3 年目は、袷（あわせ）着物というつりあいという違う布（きれ）を合わせる技能が必要になる製品に携わる。4 年目はトータルな技能が求められる訪問着、5 年目は継ぎの縫い目が隠せずごまかしが効かないコートを製作する。

「それぞれの製品は製作工程が科学的に分解されており、プロになるのであればこの工程はこの時間以内に、という時間が決められています。この時間をクリアすることで技能が向上していきます。」とは高田氏。こうして 5 年目までにプロフェッショナルとしての技能が確立されていくのである。

和装工房 匠（高田和裁）

- 業種：和装製品製造業
- 住所：兵庫県姫路市
- 代表者：高田 典浩
- 設立：昭和61年
- 従業員：10名
- 技能士：50名

技能士へのインタビュー

岡澤　さおり 氏 （41 歳）　1 級和裁技能士
高田　早奈恵氏（25 歳）　1 級和裁技能士

2 人のタイトルホルダーにインタビュー

高田和裁の社員は全員が技能グランプリや技能五輪のタイトルホルダーである。今回は、岡澤氏、高田早奈恵氏にお話を伺うことができた。それぞれ技能グランプリと技能五輪で優勝した実績がある。

岡澤氏は、学生時代から縫製が好きで、専門学校で基礎を身に付けた上で同社に入社した。好きな縫製が存分にできるということで、迷いなく入社したという。

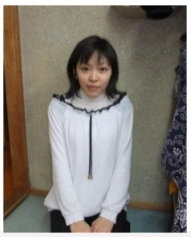
早奈恵氏は、始めから縫製が好きだったわけではないという。「高田和裁をホームページで見つける前は、全く違う職場で働いていました。高田和裁のホームページには、『プロフェッショナル養成所』と書かれていて、自分もプロになりたいと思い門を叩きました。」と語ってくれた。プロになりたいという強い思いがその後の技能五輪全国大会での優勝につながっているのだろう。

技能グランプリ優勝者である岡澤氏

やればやるほどいいものができる

高田和裁で頑張れば、5 年でプロになれる。早奈恵氏は、「練習すればするほど技能が向上し、きれいな製品を作ることができます。技能のレベルが 1 つ上がると、今までに作れなかった製品が作れるんです。」と熱く語ってくれた。

岡澤氏は、「積み上げれば積み上げるほどうまくなるのが和裁の世界。限界がないところが和裁の技能の魅力です。大好きな縫製に仕事として携わることができていて、技能が伸びることで作れる製品の幅が広がるのが喜びです。」と語る。



技能五輪優勝者である高田早奈恵氏

好きなことが仕事にもなっている 2 人は、これからも技能を磨き続ける。

異業種とのコラボ（連携）で新たな分野を開拓

タイトルホルダーであるお 2 人は、異口同音に語る。「技能グランプリや技能五輪でのタイトルは、プロフェッショナルとしての技能を確認するための手段です。一流のプロであるからには、タイトルが取れなければおかしい。そういうプレッシャーもありますが、プレッシャーが大きいからこそタイトルが獲れた時の喜びは大きいですね。」技能グランプリや技能五輪は、出場することに意義があるのではなく、タイトルを獲ってこそ意味があるという。プロ中のプロとしてのプライドが見えた。

タイトルホルダーであることで、新たな分野の開拓にもつながっている。「タイトルホルダーがたくさん在籍していることで、色々な方々から『一緒に事業をやりませんか』と言って頂けます。」と早奈恵氏。姫路市の皮革事業者とのコラボレーションで皮革と和織物を織り混ぜた製品が開発された。顧客の評判も上々のようである。また、LED（発光ダイオード）という新技術を用いた発光体を製作する上場企業のウシオライティングとのコラボによる照明器具の製作も手掛けている。

顧客に喜ばれる製品を作り続けたい

今後について聞いてみたところ、2 人とも技能レベルを高めて新しい分野を開拓していきたいという点を共通して挙げた。

「お客様のニーズに合わせて、最高の満足を感じてもらえる着物を作りたいですね。（岡澤氏）」

「着物に限らずカバンや名刺ケース、その他色々な製品を作ってみたいです。皮革事業者などの異業種とのコラボもどんどん進めていきたいです。（早奈恵氏）」

既にタイトルホルダーであるお 2 人は、まだまだ今以上の高みを目指している。今後の高田和裁はさらなる事業領域の拡大がみられるだろう。

高田和裁の裁縫現場